

しろわこうじ 白羽柑子

Citrus leucocarpa

かつて、このまちには徳川家康ら江戸幕府の歴代将軍が愛したとされるミカンがあった。

今回の特集では、地域の新たなシンボルとなり得る「白羽柑子」の歴史をひも解きます。

郷土の名産品「白羽柑子」

「白羽柑子」は日本原産種のミカンで、小ぶりで皮が薄いという特徴がある。その歴史は古く、徳川幕府の歴代将軍が好んで食べたと言われている。その中でも家康公は特に思い入れが強かった。

約450年前、家康公は武田軍に追われ敗走するさなか、白羽村の旧家の庭に植えられていた白羽柑子の木の影に隠れ難を逃れた。その時に食べた柑子の味が忘れられず、天下統一後には白羽神社に奉納を命じたと伝えられている。『白羽村誌』には、白羽神社の神主が徳川家に「白羽柑子」を貢進したことが示されている。



▲白羽柑子と徳川家のことが記されている『白羽村村誌』

「徳川時代ニ神官ノ幕府ニ出デ、年賀ヲ述ブルノ例アリ偶白羽神官瀧氏白羽産ノ柑子若干ヲ將軍家ニ献上シタルニ甚ク賞美セラレ内命ニ依リ其後毎度之ヲ持参スルヲ例トセリ」

訳…江戸時代には、神主が幕府に

年賀を述べる習慣があった。たまたま白羽神社の瀧神主が將軍家に少量の「白羽柑子」を献上したとき、とても評判が良かったことから参賀の際に献上するようになった。

江戸時代に植物やその他の自然物を研究した学者、貝原益軒が編纂した『大和本草』にも「白羽柑子」のことが掲載されている。

「白和カウシ遠州白和村ニアリ故名ツク 其皮ウスク色黄ニテ味ヨシ不酸カラ ミカンヨリ大也」

訳…白羽柑子は、遠州白羽村に生えていることから白羽柑子と名付けられた。黄色く薄い皮が特徴。味は良く、酸っぱくない。ミカンより大きい。



▲東京都千代田区永田町にある国立国会図書館に保管されている『大和本草』